



第 59 回 「サイエンス・ファクト」の言葉

Gareth Leng and Rhodri Ivor Leng 著、塚本浩司監訳、多田桃子訳、「サイエンス・ファクト」（副題：科学的根拠が信頼できない訳）（ニュートンプレス、2023 年 2 月）は新書版 601 ページの大著です。生物医学分野の研究を例にとり、科学研究が抱える諸問題（虚偽の学術論文、科学用語のあいまいさ、科学の実証主義、科学研究のパラダイム変化、論文のインパクトファクターと出版社の営業戦略など）を詳細に記述しています。ただしその記述は冗長すぎると言わざるを得ません。また、英語版の原題は THE MATTER OF FACTS であるにもかかわらず、日本語版ではなぜ上記のような題目になったのか、その経緯、理由が不明です。それらを明らかにすることも含め監訳者、訳者は日本語版の「まえがき」を書くことが多いのですが、本書にはそれがないのです。出版の趣旨が伝わってきませんでした。

本書で記述されている内容は多くの読者にとって目新しいかもしれませんが、またこれを読んで科学研究に失望することもあるかもしれません。しかし研究に携わっている私から見ると、特に目新しい内容の記述はありませんでした。科学研究に関して私も常々考えていた問題点が本書でも記述されていたので、いちいち「ごもっとも」と納得した程度に留まりました。何とか通読しましたが、読書特有の爽快感は得られませんでした。

大著ではありますが、本稿で指摘すべき点は、結局は最終章の「第 25 章 学識」に集約されていると思います。往々にして著者の主張のまとめを末尾に書くわけですから。そこで主張されているのは、「科学を発展させるのは『理解したい』という研究者の情熱である」ということです（これは以前私が「忘れえぬ言葉 3. 本居宣長の言葉」に記した「wants 型」の研究に対応します）。さらに、この情熱に駆られて研究を進めるのは研究者自身の「学識」であると主張しています。ここで著者は「学識」を「ある学術分野での教育、研究、実践を発展させるための厳格な探求のプロセス」と定義しています。そしてそのような学識のある人を「学者」と呼んでいます。さらに「学者」とは、「各自のネットワークで優れた実践を広め、事態が間違った方向へ進みそうになったときは警鐘を鳴らしてくれる人」と説明しています。以上の主張、指摘も「ごもっとも」以上のものではありませんが、要するに学者とは研究を実践しつつ、警鐘を鳴らせる人なのでしょう。後者は「批評」に対応すると思いますが、私自身も研究者は優れた実践と批評の能力を備えた学者でなければならぬと考え、肝に銘じています。